(4) 河道および周辺の変化

① 大場付近（常陸大宮市小野・小場地区）の河道の変遷

那珂川は常陸大宮市から平野に入る。大場（常陸大宮市小野・小場地区）付近では那珂川が乱流し，かつては川筋も複数あった。昭和 22 年（1947）カスリーン台風時の豪雨による氾濫を契機に堤防が整備されていった。

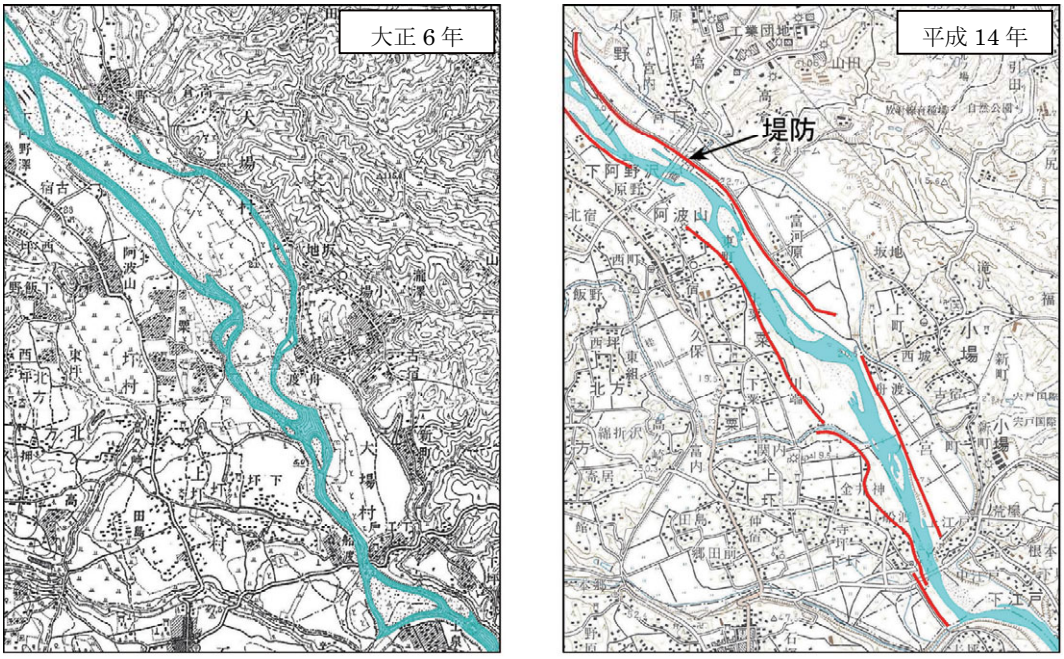

図 3-20　大場付近の河道の変遷（大正 6 年（1917）と平成 14 年（2002））

② 水戸，千波湖の変遷

千波湖は桜川河口が那珂川によって堰止められてできたもので，藩政時代には約 129ha あった。大正 10 年（1921）茨城県は食料増産のため，千波湖の東（下沼）の干拓を起工，昭和 7 年（1932）に竣工し，新たに 69ha が水田化された。千波湖の一部であった現在の桜川沿川は市街地になっている。千波湖の面積も江戸時代の約 4 分の 1，周囲 3.1km，面積 33.5ha となっている。

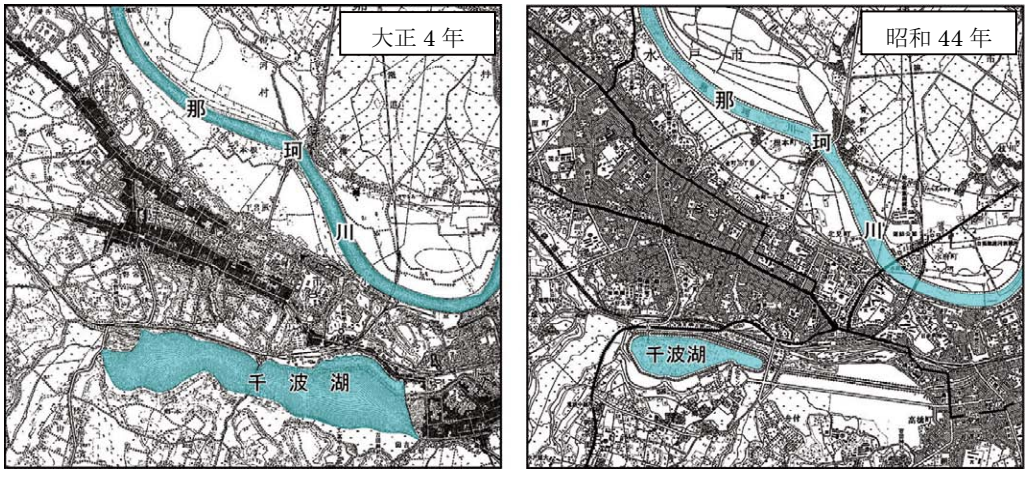

図 3-21　千波湖の変遷（大正 4 年（1915）と昭和 44 年（1969））

③ 涸沼（ひぬま）の変遷

涸沼（ひぬま）沿岸低地帯は干拓地が多く，涸沼川と涸沼周辺には水田地帯が広がっている。干拓事業は，江戸時代からみられたが，大がかりな事業は昭和に入ってからで昭和 43 年（1968）までに行われた。

干拓（かんたく）前の涸沼広浦（ひぬまひろうら）（昭和の初め頃）
（写真：『写真記録茨城の 20 世紀』）

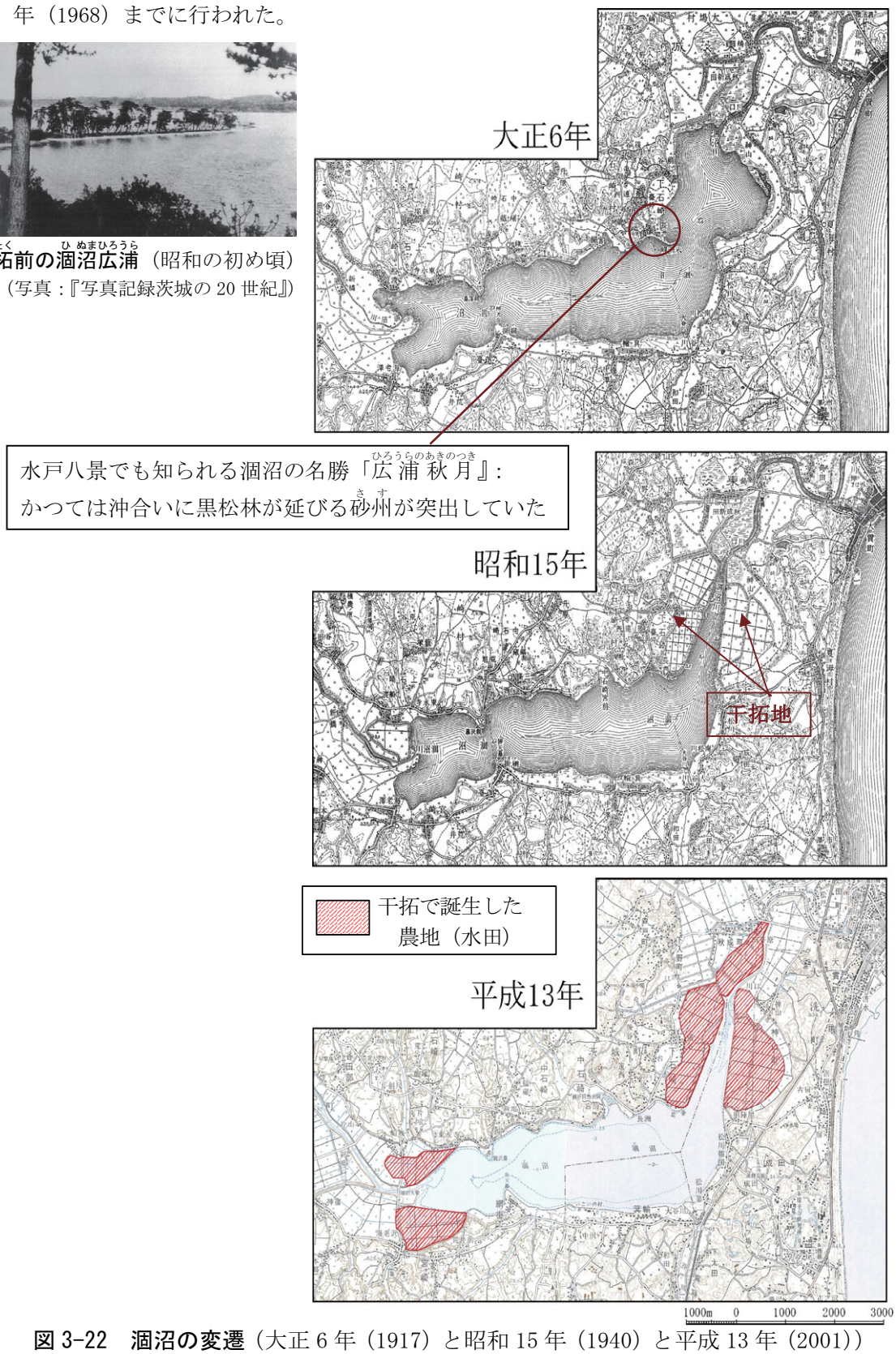

図 3-22　涸沼の変遷（大正 6 年（1917）と昭和 15 年（1940）と平成 13 年（2001））